［研究資料他］

高齢者擬似体験演習を通しての高齢者観
－レポート分析より－

The Attitudes Toward Elderly through Simulation Experience Elderly
- from Analysis of Report -

杉田　由佳理　　中川　孝子　　太田　尚子
Yukari SUGITA　Takako NAKAGAWA　Naoko OTA

青森中央短期大学　看護学科
Aomori Chuo Junior College, Department of Nursing

Key words；老年看護学，高齢者擬似体験，高齢者理解，高齢者観

Ⅰ．はじめに

平成20年度の看護教育カリキュラム改正にあたって厚生労働省は、「老年看護学」において、「生活機能の観点からアセスメントし、看護を展開する方法を学ぶ」ことを重視している[1)]。これを受け山田ら[2)]は、「老年看護学の展開は、成人看護学をはじめ他領域の看護過程とは方向性や内容に若干の相違がある」とし、上記の生活機能を「人間が生活者としていきいきと暮らすための『もてる力』とその働き」と定義付けている。北川[3)]は、「老年期を生きる個の高齢者を大切に思い、その人の人生のゴールに近い生命と生活の安寧に貢献することを純粋に願う」と記している。

看護学生が、高齢者の『もてる力』を見出し、個の高齢者を大切に思えるようになるためには、高齢者とはどのような存在なのかを理解することが重要である。そして、高齢者を理解する過程は、学生の高齢者に対するイメージや捉え方といった高齢者観の反映を受け、いったん獲得した後も変容していく可能性を持っている。高齢者観や高齢者理解に関する先行研究は数多くあり、樋口ら[4)]は高齢者理解に関する研究内容の動向を分析し、【高齢者の身体的・心理的特性の擬似体験学習による高齢者理解への効果】【実習および教授方法の工夫による高齢者理解への効果】【高齢者との相互行為による高齢者理解への効果】【講義・演習科目受講による高齢者理解への効果】【講義・演習・実習を通した縦断的な学習による高齢者理解の現状と効果】【学生の特性と高齢者理解の関連】の６カテゴリに分類している。そして、「今後は用語の定義を明確にして、学生が高齢者理解を深めて行く過程を客観的に測定できる用具の開発や、学生が様々な学習や経験を統合しながら高齢者理解をしていくという、学生の成長過程を捉えた高齢者理解への検討が必要である」と結論付けている。高齢者理解に関する先行研究では、高齢者理解や高齢者観といった用語の定義が明確ではなく、高齢者理解が深まる過程を測定できていないことがうかがえる。

本学の学生は、１年生後期の高齢者看護学概論の授業で高齢者擬似体験演習を行い、加齢による身体機能の変化を体験することで得た高齢者に対するイメージや、自身の心理的変化をレポートに記述している。その後、２年生前期の高齢者看護実習Ⅰと２年生後期の高齢者看護学実習Ⅱで、それぞれ終了時に、実習で得た高齢者観を記述している。これらの記述内容を分析し比較することで、学生が高齢者観を深めて行く過程を明らかにできるのではないかと考えた。更に、高齢者観の定義や、高齢者観と高齢者理解の関係性について、示唆を得ることができるのではないかと考えた。そこで今回は、学生が高齢者観を深めて行く過程を明らかにするための基礎資料として、１年生後期の高齢者擬似体験演習を通してのレポートを分析した。

Ⅱ．目的

高齢者擬似体験演習を通してのレポートを分析し、学生が高齢者観を深めて行く過程を明らかにするための基礎資料にすることを目的とする。

Ⅲ．高齢者擬似体験演習の実際

１）５～６人が１組となり、全員が高齢者役・援助者役を体験する。

高齢者役は「高齢者擬似体験スーツ・ゴーグル・耳栓・手袋」（坂本モデル）を使用する。

〈高齢者役〉

①高齢者擬似体験スーツの上にパンツとズボン、靴下を履く。

②廊下とスロープを歩く。

③洋式トイレで排泄動作（ドアの開け閉め、パンツの上げ下げ、トイレットペーパを取る、便座に座る、立ち上がる）をする。

④階段の昇降をする。

⑤壁の掲示物を見る。

⑥新聞をめくる。読む。

⑦皿の中の小豆を箸でつまむ。

〈援助者役〉

①コミュニケーションをとりながら援助の必要性を高齢者役に確認し、状況に応じて援助を行う。

〈感想レポートの記載〉

体験終了後に、１．高齢者に対してのイメージ（擬似体験前）、２．実際にどのような気づきがありましたか。（起居動作、移動動作、更衣動作、食事動作、コミュニケーションなど）、３．高齢者にどのような接し方や態度が必要だと考えましたか、４．どのようなサポートの必要性を感じましたか、５．高齢者擬似体験を通して、あなたの心理面で何か変化はありましたかの、５項目について自由に記載する。

Ⅳ．研究方法

１．研究対象

研究対象は、本学の１年生85名が高齢者擬似体験演習後に記載したレポートのうち、文書で同意が

得られた54名のレポートとした。

２．データ収集期間

2012年10月７日～10月28日

３．分析方法

レポートの５項目のうち、「１．高齢者に対してのイメージ（擬似体験前）」と、「５．高齢者擬似体験を通して、あなたの心理面で何か変化はありましたか」の２項目について、研究者らが個々に読み、学生が「高齢者理解」として具体的に表現している文章をそのまま抽出した。その結果を研究者らで検討し、「高齢者観」について共通するキーワードを捉え、カテゴリ化した。

４．用語の定義

高齢者観とは、漠然とした高齢者に対するイメージから始まり、高齢者を生活者としてどう捉えるかであり、個人の価値観を反映しながら変容していく可能性をもつものである。

本研究では高齢者観を、「高齢者に対するイメージや捉え方」と表現する。

Ⅴ．倫理的配慮

青森中央短期大学研究活動推進委員会の許可を得て実施した。

対象学生にはレポートの分析について、研究の目的と内容、自由意思による参加、拒否や途中中断する権利、研究参加の可否が成績評価に影響しないこと、匿名性の確保が十分であることを、口頭と文書をもって説明した。研究の了解に関しては、文書で同意を得た。同意書の配布は直接配布とし、回収は回収ボックスを設置して行った。データは研究者が厳重に保管し、データの処理が終了次第、シュレッダー処理することとした。このデータは、研究以外には使用しないことを十分に説明し、同意書にも記載した。

Ⅵ．結果

高齢者擬似体験学習の感想レポートの「高齢者に対してのイメージ（擬似体験前）」の項目からは、【感覚機能が低下している】【運動機能が低下している】【自分とは生活行動が違う】【特徴的な容姿や資質がある】【思考・判断力が低下する】の５つのカテゴリが抽出された。

「高齢者擬似体験を通して、あなたの心理面で何か変化はありましたか」の項目からは、【出来る事と出来ない事を踏まえた援助が必要である】【身体機能の低下が心理面にも影響を及ぼす】【自分にも加齢に対する課題がある】【個々に生活行動の違いがある】の４つのカテゴリが抽出された。

内容は「表１　カテゴリ分類」に示す。

「高齢者に対してのイメージ（擬似体験前）」の中から、高齢理解について得られた内容は217件あった。視力と聴力の低下に関する内容が93件と最も多く、「感覚機能が低下している」と高齢者観のひとつのカテゴリとした。関節可動域の変化や歩行障害に関する内容が84件で、「運動機能が低下している」とした。生活の中で出来ないことがある、健康面に気を付けている、薬を飲んでいるなどの内容が22件あり、「自分とは生活行動が違う」とした。かわいい、動けるのに動きたがらないなどの10件の内容を「特徴的な容姿や特徴がある」とした。会話が続かないと、反応が鈍いとの８件を「思考・判断力が低下している」とした。

「高齢者擬似体験を通して、あなたの心理面で何か変化はありましたか」の項目から得られた内容は160件あった。危険を予測して介助しなければならない、目線を合わせたり、声をかけたりすることが大切、遠すぎず近すぎない距離で接するなどの内容が99件あり、「特徴を踏まえた援助が必要である」とカテゴリ化した。想像以上に動きにくく、恐怖や不安、絶望、孤独を感じるなどの42件を「身体機能の低下が心理面にも影響を及ぼす」とした。積極的に手助けをしたい、自立度が低下していく老化は嫌だなどの12件を「自分にも加齢に対する課題がある」とした。動きが遅い高齢者に苛々したが動きが遅い理由がわかった、体が動き難くても畑仕事や家事をこなしているなどの３件を「個々に生活行動の違いがある」とした。

表１　カテゴリ分類

高齢者に対してのイメージ（擬似体験前）

カテゴリー	内容
感覚機能が低下している（93）	視界がぼやける（26）・色の識別が困難（26）・耳の聴こえが悪く聞き返す（23）・視野が狭い（18）
運動機能が低下している（84）	動きが遅い（33）・腰や背中が曲がっていて歩き難い（24）・膝・肩・足の関節の動きが悪い（10）・膝・肩・足の関節が痛む（8）・足腰が弱い（5）・疲れやすい（4）
自分とは生活行動が違う（22）	援助がないとやりたいことが出来ない（7）・生活するのが大変（3）・食べこぼしが多い（3）・固いものが食べられない（3）・整容が行き届いていない（3）・車椅子の生活（1）・健康面に気を付けている（1）・薬を飲んでいる（1）
特徴的な容姿や資質がある（10）	何でも知っている（3）・動けるのに動きたがらない（2）・言葉がきつい（2）・小さくてかわいい（2）・お茶が好き（1）
思考・判断力が低下している（8）	会話が続かない（5）・反応が鈍い（3）

高齢者擬似体験を通して、あなたの心理面で何か変化はありましたか

カテゴリー	内容
出来る事と出来ない事を踏まえた援助が必要である（99）	自分が出来る事を当たり前だと思わずに危険性を予測して介助をしなければならないと思った（37）・目線を合わせたり、声を掛けたりすることが大切だと分かった（26）・高齢者を敬い優しく広い心で接しなくはいけない（17）・遠すぎず近すぎない距離で接することが必要だ（8）・全て介助するのではなく出来る部分に注目して援助することが必要だ（5）・急がせずに待つ姿勢が大切だ（4）・手すりやスロープを活用することが重要だ（2）
身体機能の低下が心理面にも影響を及ぼす（42）	動き難さが想像以上だった（36）・体の不自由さは恐怖や不安、絶望に繋がると思った（4）・見え難かったり聴こえなかったりして孤独になった（1）・介助を申し訳なく感じた（1）
自分にも加齢に対する課題がある（12）	もっと祖父母の手伝いをしなければいけないと思った（4）・自ら進んで積極的に手助けできるようになりたい（3）・自立度が低下していく老化は嫌だと感じた（3）・年をとって動けなくならないように、日々、鍛える必要がある（1）・高齢者の動きが遅いのは援助の仕方も関係している（1）

個々に生活行動の違いがある（3）	バスの乗り降りで動きが遅い高齢者に苛々したが、なぜ遅いのかがわかった（1）・テレビの音が高かったり、よく聞きかえしたりする理由がわかった（1）・体が動き難くても畑仕事や家事をこなしている高齢者は偉いと思った（1）

Ⅶ. 考察

高齢者に対してのイメージ（擬似体験前）の項目には、視力と聴力の低下、関節可動域の変化や歩行障害に関する内容が多かった。これは、学生が擬似体験前の高齢者に対するイメージよりも、擬似体験で感じた内容が多く含まれていると考えられる。学生が擬似体験を通さずに感じていた高齢者へのイメージは、「固いものが食べられない」「車椅子の生活」「健康面に気を付けている」「薬を飲んでいる」「何でも知っている」から抽出された【自分とは生活行動が違う】と、「何でも知っている」「動けるのに動きたがらない」「言葉がきつい」「小さくてかわいい」「お茶が好き」から抽出された【特徴的な容姿や資質がある】の、２つのカテゴリに絞られる。

高齢者擬似体験を通して、あなたの心理面で何か変化はありましたかの項目でも、視力、聴力、歩行機能の低下への援助方法に関する内容が多数だったが、「高齢者を敬い、優しく広い心で接しなくてはいけない」「遠すぎず近すぎない距離で接する事が必要だ」「出来る部分に注目して援助することが必要だ」「急がせずに待つ姿勢が大切だ」「自立度が低下していく老化は嫌だ」「年をとって動けなくならないように、日々、鍛える必要がある」「動きが遅い高齢者に苛々したが、動きが遅い理由がわかった」「畑仕事や家事をこなしている高齢者は偉い」などの内容があり、【出来る事と出来ない事を踏まえた援助が必要である】【身体機能が心理面にも影響を及ぼす】【自分にも加齢に対する課題】【個々に生活行動の違いがある】と、高齢者をより具体的に捉えたカテゴリとなった。漠然とした高齢者へのイメージが、擬似体験を通して、高齢者に対する態度や感情、加齢や老年期の生活を対象とした価値観へと変化していることがうかがえる。

乗松[5]は、対象の状況を理解する能力の育成には、知識としての概念的な学びを統合的に理解することの重要性を述べている。今回の分析結果からも、高齢者擬似体験を通して高齢者の身体機能の変化を体験することは、高齢者に対する漠然としたイメージから、高齢者への態度や感情、価値観へと、高齢者観を変化させる効果があると示唆された。

村田ら[6]は、学生が高齢者の話や生活体験を聞き交流する体験が、高齢者理解には重要であると述べている。また、佐野ら[7]は、学生が実習において高齢者と実際に関わり、その人の尊厳や尊重する関わりの重要性を実感することが、エイジズムを弱くする経験になると述べている。今回の対象学生は、この後、高齢者看護学実習Ⅰで、病院で治療を受けている高齢者と関わり、高齢者看護学実習Ⅱで、高齢者施設で疾患や障害を有しながら生活する高齢者と関わる。実習に携わる教員は、学生が高齢者との関わりを通して、今回の分析内容にあった「遠すぎず近すぎない距離」とは何がどれ位なのか、「できること」を維持するためにはどうしたらよいか、高齢者は「恐怖や不安、絶望」とどのように向き合っているのか、自分も高齢者になる事を考えると「課題」は何かなど、高齢者観を多様にさせて高齢者理解を深めさせる事が重要であると示唆された。

Ⅷ. まとめ

高齢者擬似体験学習後のレポートから、「高齢者に対してのイメージ」として、【感覚機能が低下している】【運動機能が低下している】【自分とは生活行動が違う】【特徴的な容姿や資質がある】【思考・判断力が低下する】の５つのカテゴリが抽出され、擬似体験をする前のイメージは【自分とは生活行動が違う】【特徴的な容姿や資質がある】の２つに絞られた。

「擬似体験後の心理面での変化」として、【出来る事と出来ない事を踏まえた援助が必要である】【身体機能が心理面にも影響を及ぼす】【自分にも加齢に対する課題】【個々に生活行動の違いがある】の４つのカテゴリが抽出された。

漠然とした高齢者へのイメージが、擬似体験を通して、高齢者に対する態度や感情、加齢や老年期の生活を対象とした価値観へと変化していることがうかがえる。また、実習に携わる教員は、学生が高齢者との関わりを通して高齢者観を多様にさせて、高齢者理解が深まるよう支援する事が重要であると示唆された。

〈引用文献〉

１）厚生労働省：「看護基礎教育の充実に関する検討会」報告書、2007

２）山田律子、萩野悦子、井出訓：生活機能から見た老年看護学過程＋病態関連図・生活機能関連図、医学書院、2012

３）北川公子：系統看護学講座　専門分野Ⅱ　老年看護学、医学書院、2012

４）樋口友紀、福島昌子、竹渕由恵、小川妙子、狩野太郎：看護基礎教育課程における看護学生の高齢者理解に関する研究の動向－2002年～2011年に発表された国内研究に焦点をあてて－、群馬県立県民健康科学大学紀要、８、89 - 101、2013

５）乗松貞子：体験学習の教育効果－看護学生の目隠し歩行および歩行体験－、大学教育実践ジャーナル、４、17 - 22、2006

６）村田日出子、小野田真弓、高野真由美：看護学生のエイジズムに関する要因－老年看護学概論および実習前後のエイジズムの変化－、神奈川県立よこはま看護専門学校紀要、４、12 - 17、2008

７）佐野望、檜原登志子、赤坂寛子：看護学生の高齢者の知識と看護の学びによるエイジズムの関連－高齢者看護学実習Ⅰの学習効果－、協立女子短期大学看護学科紀要、５、７-16、2010